

## 子どもの心を耕そう—その2 お腹いっぱい症候群

体育の時間に行った「走り幅跳び」。練習のプロセスを終えた後の記録測定で、力を込めて跳んだのに踏み切りが合わず、20センチ以上も損をしてしまったA君。自分自身も納得できる跳躍でなかったことを承知しているのに、変にさばさばした表情で戻ってきたA君の姿に、心の内の悔しさを思い量った教師（先月号で紹介したかつての教え子）は、「残念だったなあ。助走のスピードと上がる角度はよかったのに。もう一回やってみるかい。」と再挑戦を促しました。しかし、返ってきた言葉は、「いいよ。」の一言。子どもの思いを先取りし、手を差し伸べたはずが、想定外の肩透かし返事。「先生、こういうことがときどきあるんです。こちらが何とかしてあげようと思っても、子どもの方で断るんです。乗ってこないんです。燃えてこないんです。向上心が失せてしまっているんです。」

一見したところではごく普通で、何ら特異さを感じさせない子どもたち。しかし、彼らが3人4人と数を増すと、場の空気は一変するという。何か冷めたような一種独特の空気が生まれるのだそうです。一生懸命話しても、反応がない。顔が緩み歓声が上がるとは思えない場面でも、さしたる変化はなし。話しぶりいことこの上なし。

「その空気は、彼らが呈する無気力感によるのです。」彼は、はっきりこう言いました。彼に言わせると、この子たちに共通して感じるのは、「無気力、無関心、無感動」だそうです。——何とかして目の前のハードルを跳び越えたい。より高く自分を伸ばしたい……。「何だ、何だ。どうした、どうした。おや、おもしろそう。あれ、どうしてそうなるの……。」「わあ、すごい。いいねえ、いいねえ、すてきだねえ……。」目にするもの、耳にするもの、手にするもの、いずれに対しても何かしら心を寄せ、黙って通り過ぎないで、喜び、笑い、驚き、怒り、反発し、そして、時に嘆き涙する……。これまで誰もが持っていたはずのこんな感覚を、みんなどこかに置き忘れてきてしまった、そんな子どもたちなんだそうです。

どうしてこんな子どもたちになってしまったのだろうか。彼と私は考えました。物があふれ、お金を出せばほとんどのものが手に入る世の中になってしまったからだろうか。高度技術革新が、便利すぎるくらい便利な世の中をつくり上げてしまったからだろうか。何とかなるだろう。誰かが何とかしてくれるだろう。そう思う風潮が子どもの世界にも浸透してしまっているからだろうか。さらにまた、核家族化が進展し、人があちこちに散らばって、近隣居住者間の人間関係が希薄化してしまったからだろうか。日本全体が緊張感を失い、日本人の心が墮落してしまったからだろうか。

多かれ少なかれ、どれも当たっているようです。どれもこの子たちを生み出した背景に値する。私たちは、そう考えました。しかし、私たちは、さらに大きな原因を見出しました。それは、今の子どもたちは、自分が望む前にいろいろなことが向こうから自分の方に来てくるという状態に置かれすぎているということです。

おもちゃ屋さんの店先には、自分が考え出すまでもなく、自分を遊ばせてくれるおもちゃが並んでいます。お金を払えば、それらのおもちゃはすぐにでも手に入ります。お菓子など、いちいちお菓子屋さんに行かなくても、しかも、しばしば3時を待たずして供給されます。三度の食事もしっかりです。まだ十分な空腹感を感じないうちに次の食事時になり、またまた十分以上の食事が供給されます。子どもたちは、十分な必要感を覚えないままに供給を受け続けます。早期教育的な習い事も、多くの場合は似た類です。子どもの要求が生まれる前に、親が大人が先回りしてルールを敷設してしまうからです。そこで、私たちは、先のような子どもたちを称して、「お腹いっぱい症候群」と呼ぶことにしました。「お腹いっぱい症候群。」——私たちはこの症状を生じさせる要因として、さらに次のことを見逃しません。

(次号に続く)

(平成20年1月)

## 子どもの心を耕そう—その3 テレビの功罪

お腹いっぱい症候群を生じさせる要因として見逃すことのできないものの一つに、テレビがあります。「うちの子って、本当に楽なの。一人で上手にテレビ見ててくれるの。お掃除やお洗濯もどんどんはかどるし、おかげで私もひと休みできるし。……。」

「うちはテレビが2台あるから、もう一台のテレビで自分の見たい番組も見られるわ。」

「そうそう、うちの子も同じだわ。教育テレビで『わんパーク』っていうのやってるでしょ。あれ、7時から9時までやってるから本当に助かるわ。」

「楽」、「助かる」——何かやわらかな、やさしいような、響きのよい言葉です。しかし、それが、本来の柔らかさや優しさとして子どもを包むものならよいのですが、この場合の「楽」「助かる」は、親、大人の側からの「楽」「助かる」であって、子どもにとってはマイナスの積み上げです。ここで、今のテレビの功罪について考えてみることにいたしましょう。

<よい点>

- ・ 映像と音声と一緒にあって伝えられるので分かりやすい。
- ・ 茶の間で、居ながらにして、日本はおろか世界各地の様子を手取るように知ることができる。また、カメラが捕らえた範囲のことという限定はあるものの、自分ではどうも立ち入ることのできない、例えば深海の生物の生態や火星探査機が写した火星の映像の世界も目にすることができる。
- ・ 人物の動きや表情が見えるので、臨場しているようにその場の空気もある程度とらえられる。
- ・ 知識が増える。子どものごっこ遊びのものが増える。付随して、ごっこ遊びの幅が広がる。

<まずい点>

- ・ 何もかも分かったという錯覚に陥る。見えていることについては見えているように伝わってはいるが、それでもそれはあくまでレンズを通した分かりだけ（五感のうちの視覚と、ほんのちよっとの聴覚を通した分かりだけ）。しかも、送られてきた映像の角度と範囲の中だけの分かりに止まる。
- ・ 人物の動きや表情も伝わってくるので、その人物の感化力が増す。（人間性・価値観の問題。好ましい人物が多く登場してくるのなら、これは「よい点」として挙げられるはずだが、現状を見る限りにおいてはその逆。受けを狙って真面目さ、正直さ、真剣さを茶化し、笑いの種にするような場面が放映されることがしばしばある。）
- ・ コミュニケーション能力を衰退させる。テレビは、こちらが返事をして、それに対しての受け答えはしない。こちらが答えなくても、どんどん進行していく。子どもは、テレビの前では無口になる。この姿勢が少しずつ日常化され、人の呼びかけ、話しかけに対しても反応が鈍くなる。
- ・ こちらが疑問を抱く前に、もう結論や結論の方向が示される。テレビの呼びかけに反応してこちらがその気になろうとしたとき、もう次の指示や呼びかけがなされる。テレビは視聴者の心の動きなどお構いなしに進行していく。見る側は、次第に次の画面を待つだけの受身人間になっていってしまう。
- ・ 何を見ようではなく、ただ何となくスイッチを、という家庭が案外多い。欲しないのに常に情報過多。見るでもなく、見ないでもなくの生活は、子どもの関心度合、集中力を減退させてしまう。

では、テレビはどのように活用したらよいのでしょうか。また、子どもたちを「無気力・無関心・無感動人間」とは逆の方向へ向かわせるにはどうしていったらよいのでしょうか。プラス発想で考えてみたいと思います。そして、それは次号で述べることにいたします。

(次号に続く)

(平成20年2月)

## 子どもの心を耕そう—その4 まず私たちが感動人間に

今月はテレビの活用の仕方から始めます。テレビの功罪については先月号で記したところですが、そのテレビを「功」にするも「罪」にするも、幼児にとっては、親次第です。扱い方を間違えば、あの「おかあさんといっしょ」(NHK番組)ですら、害多くして益少なしとなってしまいます。

扱い方を間違え—どういことでしょうか。先月号で「……教育テレビで『わんパーク』っていうのやってるでしょ。……」というあるお母さんの言葉を取り上げました。この「わんパーク」という番組は幼児向けに作られた番組で、内容も当然のことながら子どもの育ちを援助するものとなっています。いわゆる優良番組です。人気の「おかあさんといっしょ」も、この「わんパーク」の中に組み入れられています。

しかし、どんなに工夫された番組でも、先のお母さんのような、あるいはこのお母さんに「うちの子って本当に楽なの。一人で上手にテレビ見ててくれるの。……」と話しかけたもう一人のお母さんのような姿勢では、子どもは次第に「罪」に染まっていってしまいます。この話しかけたお母さんは、「一人で上手に見ててくれる」と言っていますが、この「上手に見ててくれる」は、お母さん自身のために他ならないからです。このお母さんの言葉に呼応したお母さんの「……助かるわ」も全く同質です。テレビのおかげで自分は子どもにかかわらないでいられる、つまり、テレビは自分にとって都合がよいものととらえているのです。こうなると、テレビは限りなく「罪」と化していきます。

子どもは、一人でテレビと向き合います。テレビは、子どもが返事をしようとしまいと、話を先へ進めていきます。疑問を抱いても、どうしてだろうと考える間もなく答えが示されます。求めたくなる前に満たされてしまいます。子どもはいつの間にか返事をしなくなります。じっくり考えなくなります。やがて、意思表示をすること、思考することがおっくうになってきます。「無気力・無関心・無感動人間」の誕生です。

常々、子どもの側に立って見つめ考えようとしている賢いお母さんは、子どもの変化に気付きます。このままでは子どもがだめになる、どうしたらいいだろうと考えます。

お母さんは、テレビ番組の扱い方を改めます。「おかあさんといっしょ」が始まると、子どもと一緒にテレビに向かいます。二人で画面を見つめます。二人とも立ったままで。

二人は一緒になって歌い、跳びはね、ころがり、笑います。文字通りおかあさんといっしょです。子どもはおかあさんと溶け合い、おかあさんと嬉しさ、楽しさを共有します。お母さん自身が得た驚き、喜びをお母さんから分け与えてもらい、自分の驚き、喜びとして心の中に再構成します。二人はとうに主体者です。とうにテレビの主役です。子どもは主役のように主体的に、お母さんの感動の仕方を吸収します。やがて、自分一人でもお母さんがしたように感動し、お母さんがしたように感動を体で表現し始めます。子どもは感動の幅が広がり、心に輝きが増していきます。

無気力・受身子どもを生じさせる供給過剰社会。無感動・無関心子どもを生じさせる今日の生活様式や行動様式。便利すぎる高機能社会の出現や大人サイドの合理的な生活様式の誕生は、子どもの心の育ちにいくつもの障害をもたらしました。子どもだけではありません。私たち自身も気がつかないまま日々蝕まれて続けています。私たち親は、大人は、賢く目覚め、子どもたちに、この障害を打破し心豊かに生きていく力を身につけさせてあげなくてはなりません。それが、感動することができる力です。祖父や祖母、曾祖父や曾祖母のような先人たちが豊富に持ち合わせていた感動する心、いうなれば鋭敏な感受性を、力として子どもたちの内に育て上げていくのです。そのために私たち親が、大人が負う課題、それは、私たち自身の感動人間への変身です。

(平成20年3月)

## 本園の教育経営姿勢 —— 精華幼稚園の思いの一端をご理解ください。

4月1日は本年度の初日。本園では、早速1回目の職員会をもちました。皮切りは、園長による経営方針の説明です。以下、その説明の中で特に力説した部分を記します。本園の真剣で一生懸命な思いをお汲み取りください。

### I 精華らしさを存分に発揮する。その1（幼児教育の本質を踏まえた精華教育を推し進める）

← 幼児教育を正面からとらえ、幼児教育の正道を歩む（地に足着けた確かな幼児教育を推進する）

#### ○ 3歳、4歳、5歳の今を大切にする。

園児たちを成人に至るまでの人間成長過程の中の3歳、4歳、5歳の子どもたちと位置づけ、5年先、10年先、15年先を見通しながら、3歳、4歳、5歳の今しか育てられない感覚、味わうことのできない感動、踏むことのできない経験・体験、3歳、4歳、5歳の今こそ育てておきたい感覚、味わわせておきたい感動、踏ませておきたい経験・体験をきちんと育て、味わわせ、踏ませていく。

#### ○ 3月28日に公示された新教育要領（学習指導要領の幼稚園版）のねらいを十分把握し、他園をリードしながら先陣を切ってこれから求められる幼児教育を推し進める。

＜これまでの教育要領と比べて変わったところ、変わらないところ＞

「幼稚園は遊びを通した教育を行う。幼児期に思い切り遊ぶと、その後の学びが豊かになる。」という根幹の部分は変わらない ← 精華教育の根幹でもある。今後も真ん中の柱として推し進める。

以下に記す内容は新たに強調された ← これまでの精華教育が改めて重要視されたと言える。

- ・ 遊びを主とした幼稚園生活を通して、義務教育及びその後の教育の基礎を培う。（5年先、10年先、15年先を見通して進めている精華の保育と同じ。精華は今後も経営の柱に据える。）
- ・ 幼児同士が共通の目的の下に、協力、工夫する。（精華の遊び、子どもがつくる精華の行事）
- ・ 規範意識の芽生えを培う。（集団の秩序を保つためにはルールが必要だという気付き）
- ・ 言葉による伝え合いができるようにする。（思いを言葉に 言葉を大切に）
- ・ 遊びを通して好奇心や探究心を育て、思考力の芽生えを培う。（一生懸命遊ぶ精華の子）
- ・ 自信をもって行動できるようにする。（精華が大切にしている自己存在感、自己肯定感）
- ・ 家庭と連携して基本的な生活習慣を身につける。（家庭の延長が幼稚園、幼稚園の延長が家庭）

### II 精華らしさを存分に発揮する。その2（これまで育て上げてきた精華幼稚園のよさを惜しみなく発揮）

＜精華幼稚園のよさ＞

朝、子どもを抱き上げる先生がいる。

- ・ どの先生も、保護者より、子どもより先に、明るい声であいさつをする。
- ・ どの先生も、全ての園児に名前呼びかけ、子どもの思いをこだまで広げる。
- ・ どの先生も、子どもと保護者を出迎え、寄り添い、居場所をつくる。（保護者も、園児も、教師も、安心と信頼の絆で結ばれる。）

・ 園庭はすべてが砂場である。

・ 園外にも積極的に出かけ、社会体験、自然体験の幅を広げる。（五感と感性を育てる）

・ 行事は先生と共に子どもが考え、先生の支えの下、子どもが創る。

帰り、子どもを抱きしめ、子どもの目を見、子どもの心を見る先生がいる。

ちなみに精華幼稚園の教育目標は「**独り立ちする子の育成**」です。この目標の具現に向けては、保育者は8つの営みを行います。詳しくは、静岡精華幼稚園のホームページをご覧ください。

（平成20年4月）

## 泣くことは大事な自己表現

「ママ、バイバイ。」「えっ、ここでいいの。」「いいの。バイバイ。ママ、帰って。」

朝の幼稚園正門前。私のお迎え抱っこを終えたYちゃんは、地に足を下ろすなり、意を決したようにお母さんに向かってこう言いました。小さな弟を乗せたベビーカーを押しながら、いつものように門をくぐろうとしたお母さんは、突然の帰宅指令にただただびっくり。そればかりか、にこりともせず真顔で話すYちゃんの口調にたじろぎすら覚えたふうでありました。しかし、賢いお母さん。瞬時に子どもの心の内を読み抜きました。

「はい、はい、わかったよ。バイバイね。行ってらっしゃい。」お母さんは笑顔でこう応え、一人で門をくぐって靴箱に向かうYちゃんを見送りました。

「様子を見てこなくてもいいですか。」脇で事の始終を見ていた私は、お母さんにそう話しかけました。

「いえ、今日はここで帰ります。見つかつちゃったらあの子の立場がなくなってしまうからです。」「1年前が懐かしくなりますね。でも、明日はまたママ一緒に来てっていうかもしれないよ。そのときは、またついて行ってあげてください。」「ええ、そうします。言ってくれるといいですけどね。では、よろしく願います。」そういつて引き返したお母さん。先ほど浮かんだ寂しげな表情は、もう消えていました。

そうしている間も、幼稚園の中には泣き声が響き渡ります。泣く子を抱っこして、園舎の中を歩いて回る保育者（教師）。一人おんぶして、一人手をつないで園庭に出て行く保育者。4月恒例の園風景です。

私は、引き続き門前で登園親子を迎えます。「おっ、来た。来た。Sちゃん、お早う。」私は、しゃがんで両手を広げ、お母さんの手を離して走り寄ってくるSちゃんを迎えます。「園長先生、お早うございます。」振り向くと、自転車をこいでくるお母さんの後ろから声がします。「おっ、その声はTちゃん。Tちゃん、お早う。」お母さんの後ろにTちゃん的笑容が覗きます。パッチン。Tちゃんと私の手のひらも、元気な朝の挨拶を交わします。

「じゃあ、よろしく願います。」年長さん、年中さんとパッチン挨拶を交わしている私の脇を、年少さんのお母さんが、どこか後ろ髪を引かれるような面持ちで通り過ぎます。「はい。行ってらっしゃい。」そう言ってお母さんを送る私の後ろから、ママー、ママー、わあん、わあん、と声が追いかけてきます。

「お帰り。今日は泣かなかった。大丈夫だった。がんばれた。」バス停で、わが子が降りてくるなりこう問い掛けるお母さんに、「お母さん、泣いていいんです。泣きたいときは泣かせてあげてください。我慢させちゃだめです。」と、間髪入れず諭すように伝える保育者。「えっ、そうなんですか。」お母さんは、驚いたように保育者を見つめ返します。「バスが出発するので、また今度お話ししましょう。じゃあ、Mちゃん、さようなら。」まだ10名くらいの園児を乗せたバスは、次のバス停に向かいます。

精華幼稚園の職員は口を揃えてこういいます。「泣いてしっかり自分を出せている子は、やがて落ち着き、幼稚園を楽しみ始めます。今まだ頑張っちゃってる子は、そのうち泣き始めます。心配なのは、一度も泣いたことのない子、泣くことのできない子です。」

泣くことは大事な大事な自己表現です。特に、初めて親元を離れる3歳児にとっては、幼稚園といえども先の見えない世界です。不安と緊張は計り知れないほど大きいでしょう。ですから、泣くのは当然、泣いて当たり前です。「お帰り。あら、泣いちゃったんだ。よし、よし。」そんなとき、賢い親は、これまで抱いていた不安と緊張を振り払ってあげようとして駆け寄ってくるわが子を、しっかりと抱きしめ、しばし安らぎの空気で包みます。子どもはやがて、いつものわが子に戻ります。お母さんは、子どもの安心は、お母さんの共感的受けとめから生まれることを知っているのです。

(平成20年5月)